

H・ジェイムズの作品における女性たち

芦 原 和 子

ホーソーンとジェイムズを比べて考えた場合、「社会」があるかないかということが問題になるように思われる。^① 実際、ホーソーンには「社会」がないように思われる。つまり「伝説とか歴史とか優雅な洗練された *social*」がないといえよう。ヨーロッパでいえば、ジェイムズが大きな影響を受けたフローベールなどは都会小説を描いたが、^② そこには明らかに「社会」が存在している。

ジェイムズはアメリカには「社会」がないとし、小説の生きた舞台である「社会」が存在しないと嘆き、『ホーソーン論』の中で、あの有名な「ないないづくし」^③を唱えた。その小説の舞台となる「社会」を求めて、ジェイムズはアメリカからヨーロッパへ渡っていったのである。ホーソーンは「社会」がなくても書ける小説を書いた。つまりホーソーンは裸かの魂を描くロマンス^④という方法を用いたわけで、そこには冷たさや深さや、高さはあるが、もっと厚みのある「社会的な肉体」は見られないのである。ジェイムズはそれに耐えられなかった。彼はホーソーンのロマンスではなく、「社会」のあるノベルを書くとした。つまりジェイムズは「社会における人間」を描き、^⑤ たかったわけで、ホーソーンとは違った近代小説を目ざしていたのである。

それゆえ、ジェイムズの小説に出てくる人物たちは、女性でも男性でも「社会」の中で磨かれ、社会の中での危

機や危険な面に対決して、「社会」の中で次第に成長してゆく人物である⁽⁵⁾。彼らはアメリカ時代の自分とは違った人間になり、人間の世の中としての「社会」を知り、人間性が細かに深まり、次第に洗練された人間になってゆくのである。ホーソーン作品に出てくる女性たちは、精神的に深いとか、精神的魅力はあるが、ジェイムズの作品に出てくる女性のような「社会的な美の洗練さ」は見られない⁽⁶⁾。たとえば『使者たち』のヴィオネ夫人のように、「歴史社会がもちうる美と魅力」は存在しないのである。

『ある婦人の肖像』⁽⁷⁾のイザベルは、「因襲の束縛を知らない自由なアメリカ女性」とか「運命に立ち向う一人の若い女性」とかいわれているが、自由と旺盛な知識欲、すぐれた想像力をもち^(56頁)ヨーロッパでは人間を豊かに成長させる無限の可能性や、貴重な運命と出会うチャンスが得られることを熱望していた。アメリカ、ニューヨーク州、オールバニの植民地初期のオランダ風の古い邸宅——かんぬきがかかり、俗世間から隔離された——の書斎で、ひとり読書をする閑された世界^(25—26頁)に耐えられなかったのは、彼女がヨーロッパで「経験の益」^(118頁)を飲み干したからである。「自信」と「誇り」をもち、「自由」と「独立」、何より「充実した経験」と自己を「発展させるチャンス」を求め、より広大な人生を夢みて、彼女はイギリスへ行く。ロンドン、テムズ河上流のエドワード6世の時代に建てられ、ヨーロッパの伝統美を象徴する伯父タッチェット氏の由緒ある邸宅の芝生の上での午後のお茶で^(4頁)、イザベルはこの歴史と伝統の完璧な美しさに感動し、新しい広い世界の提示に歓喜する。しかしイギリス貴族の急進派、ウオーバートン卿と出会ったとき^(100頁)、彼の育ちの良さとすぐれた人格を認めるとともに、彼女が彼に一種の物足りなさを感じることも事実である。このようなすばらしい機会が提供されたにもかかわらず、ウオーバートン卿の求婚を彼女が拒絶したのは、「自由が制限され」、「自由の意識が自分から奪われる」^(106頁)とか「自分の運命から逃げ出すことになる」^(106頁)とか「人生から自分を引き離したくな

い」(65頁)と考えた結果であらう。しかしこれはイザベルの「ごうまんさ」であり、humanityを知らない「ごうまんさ」といえる。その後、彼女はある男性にだまされ、あやまった結婚をしてしまう。人生の不幸や悲しみを知らなかった彼女は最初、幽霊が見えなかったが、結婚して苦しみを体験してから、幽霊を見ることができるようになった。ラルフの幽霊(70頁)がわかる人間になる——つまり陰のわかる人間になったのである。

イザベルは「結婚生活のはるか見通せる大道が突然暗くて狭い袋小路である」ことがわかり、「満月を見たのだ——人間全体が見えた——一部を全体と間違っていたのだ」(82頁)と彼女は悟る。「年月は単に彼女をより豊かにする影響だけを与えているように見える。彼女の青春の花は、今もなお失せてはいなかったが、その花は以前よりもっと静かに落着いてその技に咲いている」——彼女はより豊かな深さをもった人間として成長する。こうして彼女は「ごうまんさ」がなくなり、次第に「けんそん」になってゆく。「悲しめる聖母マリア (mater, derolosa) のように黒いベルベット(喪服)をつけたイザベルは、ローマの廃墟(世界の廃墟)に立つ。その姿は彼女の心の廃墟を意味する。「彼女は荒廃した教会の中で、異教の廃墟から移された教会の大理石の柱が苦難のよき友となってくれ、かび臭い香りも、長いこと聞きとどけられない祈りのように」(83頁)感じた。結局、彼女はパンジーを育てることが生きがいになるのである。イザベルの場合は「社会の影響」がよく働いた場合といえよう。つまり「稜」がなくなる——とげとげしさがなくなるのである。しかし社会における人間には、良い意味の「かど」が必要で個性が必要である。

ジェイムズの小説では、社会的体験により、その個性、つまり self-identity や、良心や、誠実さや、道徳がなくなるケースが多く見られる。社会によって個性としての「稜」を失い、self-identity とともに誠実さを失った人間が、ジェイムズの小説にはよく出てくる。たとえば『ある婦人の肖像』に登場するオズモンドやマール夫人などは

「後」を失った人間である。彼らは世間的知恵のみで、人間性や誠実さや善良さを失った不幸な人々である。

またジェイムズの小説には、アメリカにない良い社会、つまりイギリスの影響により、良くなる人間と、悪くなる人間と、何の影響も受けない人間の三つのタイプの人物がでてくる。たとえば『使者たち』に出てくるストレーザの友人、ウエイマーシュは、ヨーロッパ的感覚の影響を受けない人間の代表である。それに反して主人公のストレーザは、パリの、良い意味の「社会の洗練さ」を受け入れて、全く違った人間になった。彼が愛を感じるようになるウィオネ夫人は「ナポレオン時代からの洗練さ」を身につけた女性で、都会ずれつまり文明社会ずれはしているが、「洗練さ」を見事に残している女性である。

『鳩の翼』は全くホーソーン的な世界が描かれていて、社会のないロマンスの世界ともいえる。ニューヨーク出身の巨万の富をもつ天涯孤独のミリーは、病身の身でありながら、人生を体験したいという熱烈な欲求をもっている。彼女は「純潔、誠実、無垢を象徴する白い鳩」とされているが、現実の余りにも残酷な裏切りの悲しみに耐えかねて「顔を壁に背ける。」つまり彼女はイギリスの文明社会に入りだまされるが、その姿は哀れで、その哀れさが、彼女をだました男性、デンシャーの後悔となり、彼は死んだミリーを恋いしうようになる。そして、だました金でケイトはデンシャーと結婚しようとするが、二人の結婚は成り立たなくなってしまう。「崇高無垢な犠牲の鳩」であり、「強者の好餌となる無邪気な鳩」でもあるミリーの偉大さは、低い世界から脱してさらに高い世界へ到達しえたことであろう。壁の方を向いて死んだミリーは、彼女の鳩の大きな翼で二人を抱きかかえたが、勝利者であるケイトとデンシャーの二人の方がみじめで、小さな存在になってしまう。白い鳩のミリーは数々の「試練」を受けて、その裏切りを許し一段と高い世界へ舞い上がる。

しかしジェイムズは、道徳や、良心や、誠実さを失った人たち——つまり世間的知恵のみで、人間性や善良さを失ってしまった女性たちを、決して悪人として描いてはいないようである。ジェイムズは、彼女たちを憎まれ役にはしても、悪い人としては描いていないのである。『ある婦人の肖像』のマール夫人や、『黄金の盃』のシャロット、『使者たち』のヴィオネ夫人など、彼女たちはみな、ある程度、悲劇的結末を迎えるが、ヨーロッパ社会の文化を身につけたすばらしい女性たちばかりである。

『ある婦人の肖像』のマール夫人は、世間知のみで、人間性を失った女性だが、すぐれた才知と深い教養、くつたくな人柄と気品を備え、ヨーロッパ文明の「洗練さ」を身につけ、「円熟」した社交性をそなえた魅力的な中年女性である。そして「豊かな経験からくる落着きと自信、共感を分かちあう柔軟性、すばらしい調和、強い感情を巧みに抑制した」(20頁)女性である。この知的なマール夫人の魅力的なイメージは、ヨーロッパの「虚偽」を象徴する墮落した女性へと変化してゆく。よく見ると、どんな頑丈な鉄びんでも、「ひび」や「きず」があるように、彼女にも「人生体験から得たひびやきずがあり」、単純な血だけではもちえない複雑さ、精神的にも国籍を失った、なぞめいた「神秘的」なところが隠されていることがわかる。「余りにもあつく世間の慣習がその上に重って、彼女の角がとれすぎてゐる」(20頁)マール夫人は、世間の慣習から創られ、上流社会との接触を強く望む極めて世俗的な女性になってゆく。昔の愛人、オズモンドとの不義の娘パンジーのために、7万ポンドの財産をもつイザベルに目をつけ、策略と計算づくで結婚を企てる。マール夫人は遺産目当てに結婚したイザベルの夫、オズモンドの愛人であり、娘のパンジーは彼女とオズモンドとの間にできた娘なのである。裏切りと策略にみちたこの恐ろしい事実、イザベルは強いショックをうけ、深い悲しみに沈む。

『黄金の盃』のシャーロットも、ヨーロッパ世界の文化を完全に身につけた教養豊かな、美しい魅力的な女性である。彼女の「朽葉色の房々した髪の毛、ジャケットの袖から見えるあらわな腕の完全な丸み、しまった肉づき、腕のほっそりして磨きたてられた美しさは、ルネッサンス時代のフィレンツェの彫刻家たちが愛した古い銀や青銅の彫刻を思わせる」(48頁) イメージで描かれている。また「フーレンスの彫刻を思わせるような、しなやかな肢体は、花開いた茎のようで、その身を包む装いは、森の女狩人のそれであり、知性豊かな女神のよう」(48頁)でもある。「金貨のたくさん入っている細長いゆるやかな財布」(49頁)というシンボルも用いられている。シャーロットは「たぐいまれな美しさ、自己を高く保ち、成熟した落着きと感じ易い若さ、受動的な優雅さをもつ。」そして彼女は人生の高い理想をめざし、「自分を高め、自分自身の人生を歩む魅力的な女性」(up, up, ever so high)であった。イタリーのタスカニー地方出身のアメリカ女性(56頁)、シャーロットが孤独、貧困、社会的背景の貧弱さ——家族、身内、富、社会的地位に恵まれない境遇——からの脱却としてヴァーヴァー氏の巨大な力に頼ろうとしたのも理解できる。学校時代の友人マギーの父親と結婚するが、昔の恋人であったマギーの夫、アメリーゴと再び関係を戻し、愛を復活させる。アダム・ヴァーヴァーとマギーの奇妙な父娘関係の犠牲となったシャーロットは社交の役割に没頭するが、ますますアメリーゴとの関係は深まってゆく。

しかし、アダム・ヴァーヴァーの金銭力に支配され、美しい装飾品としての存在に甘んじてしまうシャーロットは、次第にアダムの「金めっきの鳥かごの中で思い通り飛び立ちたくて、自由に飛べないことはわかっていながら——小さい翼を力なく羽ばたく、羽をむしりとられたあわれな鳥」(60頁)になってしまふ。シャーロットの袋小路に追いつめられて出口をふさがれ、閉じこめられた不幸な「束縛の姿」は、「かすかに光る絹のなわ」(60頁)で首をつながれ、「美しい首のまわりにつけた絹の長い端綱の端は夫、アダム・ヴァーヴァーのポケットの手に握られている」(64頁)ようだった。細長い絹のひもにより操られているシャーロットの悲しい運命は、鉄格子ごしに

外をのぞいている鎖でつながれた囚人のように見える。また彼女は古代ギリシャ神話に出てくる不幸な女神の「あぶに攻めたてられたイオー」(60頁)や「わびしい海辺をさまようアリアドネ」(60頁)のような孤独な女性になってしまう。そして最後に、自分の夫アダムとともに、美術品をたずさえてアメリカへ帰ることになる。あわれにも夫とともに外地へ追放されるシャーロットの苦悩の姿は、「海の向うの恐ろしい町(アメリカ)への追放の姿」(68頁)として描かれ、「何マイルもの大海原と州から州へつづく恐ろしい大きな国を見る——ヴァーヴァー夫妻がくる日もくる日も一步一步世界の果てを歩いてゆくを見る」(68頁)という流れ者のあわれな姿として表現されている。この知的な美しい女性、シャーロットも哀れである。

『使者たち』⁽³⁾のヴィオネ夫人は、その中でも最も華やかな存在で、彼女の魅力を支えているのは、歴史と文化の魅力である。古いバリ、ことに「シャトーブリアンや、スタール夫人や、若き日のラ・マルティニエの時代の余韻を残した」(223頁)古い伝統 (age of past) の魅力をもつ女性である。彼女は「ルネッサンス時代の銀貨に彫まれた女人像」(252頁)として描かれ、「朝雲の中に立つ女神」(252頁)や、「夏の海に半身をあらわした海の妖精」(252頁)を連想させ、静かなゆとりと斜陽の美しさをそなえた女性である。クレオパトラのように、複雑な美と多様性をもつヴィオネ夫人は、さまざまな面や性格をもつ社交界の女性である。「顔はぬけるように白くて、体はほっそりしていたが、顔だけはふくよかで、眼と眼の間が離れているのが、異国風な印象を与えていた……彼女の上品な黒い袖の下には、金属のふれあう微かなひびきがあったが、それはたくさんさんの腕環や飾り環をつけているからだ」(194頁)つまり彼女は natural と artificial、真と偽が一致したような洗練された美しさをかねそなえていた。「美しく受動的に」先祖の残したものを受けていっている彼女の部屋は、「第一帝政時代の栄光と繁栄、ナポレオン時代の美的な趣味や、偉大な伝統のほの暗い光輝」(223頁)を感じさせ、「品位を重んじ、個人の名誉を重んじる意識」

(23頁)を思わせる。受動の美しさ、artificiality が次第に洗練されてゆく cultivate された美——ヨーロッパの美の象徴、その魔力にストレザーはとりつかれてゆく。チャドを立派に成長させたヴィオネ夫人にストレザーは遅ればせながら第二の青春を取り戻そうと愛を感じる。ノートルダム寺院でストレザーが彼女に会ったとき、「黒地のそこに渋いぶどう色がかすかにすいて見える服地、きつちりと小さく結いあげた髪の魅力的なつつましさ、腰を掛けた膝のうえに組み合わせた両手のグレイの手袋の静かな印象」(25頁)——彼女の姿にストレザーは一種の啓示を感じ、僧院を表わす罪の魅力をおぼえる。

しかしバリ郊外の河岸でボートに乗ったチャドとヴィオネ夫人の二人の親密そうな姿を見たとき、二人の真の愛の関係がわかり驚きと強いショックを受ける。結局チャドはヴィオネ夫人と別れてアメリカへ帰る決心をし、彼女はストレザーの前で取り乱して女中のように泣き崩れる。こうしてフランス文化の最高品であり、「優雅さ」と「威厳」と「円熟美」と「情熱」をかねそなえたヴィオネ夫人は、次第に「知性の弱さ」「俗っぽさ」と「安っぽさ」を感じさせるようになり、不名誉や恥をさらけ出し、その美は崩壊してゆく。彼女は「断頭台に立たされた、白いドレスのローランド夫人」(27頁)を象徴する悲劇的な女性に変身するのである。

ジェイムズはこのように道徳や良心や誠実さは失ったけれども、洗練さと魅力はまだ残しているこれらの女性たちを、同情とあわれみの目で眺め、可哀そうで憎めない気の毒な女性たちとして描いているように思われる。つまり不幸にも、社会においてさまざまな事情から、社会の中で危機や危険や悲しみに会い、道徳や良心や誠実さを失わざるをえなかったこのような女性たちに、ジェイムズは意外なほどの寛大さを認めているようである。そしてジェイムズの特徴の一つは、彼女たちの破滅一步手前で、彼女たちを破滅させずにとどまらせているという点である。ジェイムズはけっして彼女たちを最後まできびしく追求しないのである。⁽¹⁴⁾

たとえば『ある婦人の肖像』のマール夫人は他国へ去らせることで終っているし、『黄金の盃』のシャーロットもアメリカへ帰国させることで結末を与え、『使者たち』のウィオネ夫人も女中のように取り乱して泣かせるだけで終っている。ジェイムズは、彼女たちを最後まで悪人として審判していないのである。これはジェイムズの女性に対する好意を示すものではないだろうか。ここにジェイムズの寛大な女性観がうかがわれているように思われないのである。

〔注〕

- (1) 小説の背景に生きた舞台となる「社会」があるかないかで、人物の展開や関係が違ってくる。ホーソーン作品の人物とジェイムズの作品の人物との主な相違は、その背景に「社会」があるかないかである。
- (2) ジェイムズは、フローベールの芸術への献身を称賛していたが、小説の生きた舞台としての社会を描くフローベールをも崇拜していた。『ボヴァリー夫人』その他の作品でも、フローベールは社会において発展、変化してゆく生きた人物を描いている。
- (3) 小説の舞台となる背景——「寺院、城、貴族、上流社会、僧侶、競馬場など」——がアメリカには欠如していた。真の小説を書く土壌がないとジェイムズが嘆いた有名な言葉。当時のアメリカは文化的に未熟な社会であった。
- (4) 現実と空想の間を描く actuality と fancy の中間地帯をロマンスと唱え、歴史的事実を素材に距離感をおき、ホーソンはロマンスの手法を用いた。
- (5) ジェイムズの作品の人物たち——特に女性たち（イザベル、ミリー、マギー、シャーロット、ウィオネ夫人など）は「社会」の中で成長し、「社会」とのつながりで発展してゆく人物である。
- (6) ウィオネ夫人の美はヨーロッパ社会において創り出された美で、「歴史と社会」を背景にした美であり、ホーソーン作品に出てくる女性とは、この点で異なるのである。
- (7) Henry James, *The Portrait of a Lady*. (1881) (〈ヘンリー・ジェイムズ作品集——『ある婦人の肖像』の訳文を引用。国書刊行会、一九八五年)
- (8) ジェイムズの場合、社会の悪、つまり金錢を中心にした悪により道徳性が喪失するケースが多いが、ホーソーンの場合は

罪(宗教的)による墮落が多い。「幸運な墮落」(Fortunate Fall)という意味では、両者の共通点はあるが、悪(社会的)と罪(宗教的)の相違があるように思われる。ジェイムズ(無垢—経験(悪)—知識—成長)、ホーソーン(無垢—罪—苦悩—成熟)

- (9) Henry James, *The Wings of the Dove*. (1902) (〈ヘンリー・ジェイムズ作品集3「鳩の翼」参照。国書刊行会、一九八三年)

- (10) ジェイムズの『鳩の翼』のミリーも孤児で純潔、無垢の白い鳩であり、ホーソーンの『プライズデール・ロマンス』のヒルダも同様である。ミリーは白い鳩になって昇天し死で終るが、ヒルダは罪を知り苦悩を体験した後、結婚する。

- (11) ホーソーンの『大理石の牧羊神』に登場するミリアムも、マール夫人と共通していて、過去があり、影のある暗黒の女として「なぞ」や「秘密」をもつ女性であるが、ミリアムは罪(殺人)によって墮落し、マール夫人は悪(金銭)によって道徳性を失う。

- (12) Henry James, *The Golden Bowl*. (1904) (〈ヘンリー・ジェイムズ作品集5「黄金の盃」の訳文を引用。国書刊行会、一九八三年)

- (13) Henry James, *The Ambassadors*. (1903) (〈ヘンリー・ジェイムズ作品集4「使者たち」の訳文を引用。国書刊行会、一九八四年)

- (14) 良心、誠実さを失った女性たちにも同情の眼で見ているのは、このようなジェイムズの寛大な女性観を示すものである。ジェイムズは作品の中で女性に重要な役割を与えている。ジェイムズにとって女性には芸術や美の象徴であり、女性を神秘的に理想化している。ジェイムズは、女性の現実面(いやな面)を余り見ず、作品の中でも女性を好意的に描き、女性にはどこか神秘的なものを残しているように思われる。

なお最近のジェイムズの女性に関する参考書として次のものがある。

- 1) Virginia C. Fowler: *Henry James's American Girl, The Embroidery on the Canvas*. (Univ. of Wisconsin Press, 1984)
- 2) Elizabeth Allen: *A Woman's Place in the Novel of Henry James*. (Macmillan Press, 1984)